

第 143 回 鶴見大学図書館貴重書展

なんてったってシェイクスピア沙翁！

展示期間：2016年7月6日（水）8月5日（金）

講演会：7月16日（土）

講師：菅野素子（本学文学部講師）

## ごあいさつ

第 143 回鶴見大学図書館貴重書展では、今年で没後 400 年を迎えたウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564–1616 年) の全集コレクションを展示いたします。世界各地で記念行事や展示が行われていますが、4 世紀を経てなお読み継がれ、あるいは上演され続けるシェイクスピアの作品には、その作品に触れる者の心をとらえて離さない特別な力が備わっているように思えます。数ある英文学作家の中でも、「北極星のごとく動かない」(『ジュリアス・シーザー』)、不動の地位を占めるシェイクスピアの魅力を少しでも味わっていただけたらと考え、展示を企画しました。

今回の展示に関して、3 点ほど記します。まず、鶴見大学図書館の蔵書についてです。本図書館は、極めて充実したシェイクスピアの全集コレクションを持っています。その多くは 18 世紀・19 世紀のもので、90 タイトルにのぼります。一つの全集は通常 6 巻から多いもので 20 巻以上になるため、展示スペースの都合上、全巻揃えた形で展示することはできません。そこで、今回は全集から 1 冊か 2 冊を展示し、シェイクスピアの名言や名セリフを、出版当時の紙面にご覧いただけるようにいたしました。

2 点目として、英語の原書と合わせ日本語の翻訳翻案作品を展示いたします。本図書館は明治期に出版されたシェイクスピアの翻訳翻案も多数所蔵しております。こうしたコレクションの利を生かし、英日並べてお見せいたします。和書の展示箇所はできるだけ英語の日本語訳に該当する部分を示すようにいたしました。

3 点目として、今回は戯曲を中心に展示とし、詩の展示は 1 点のみといたしました。シェイクスピアは戯曲とともに、珠玉の詩作品群を残しています。しかし今回は展示スペースの都合から、そして展示を企画した者の都合から、1 点に絞って展示しています

それでは、どうぞ永遠のアイドルのように光輝くシェイクスピアの世界をお楽しみください。

文学部英語英米文学科  
菅野素子

## 第1部 シェイクスピア+世界

### 1. 『シェイクスピア戯曲集』 ファースト・フォリオ（第一・二折本）（復刻版, 1910年） ロンドン：アイザック・ジャガード&エド・ブラウント 1623年

*Mr. William Shakespeare's comedies, histories, and tragedies.*

シェイクスピアの全戯曲を一冊にまとめた最初の全集である。没後7年目に出版されたもので、シェイクスピアとは役者仲間でも友人でもあったジョン・ヘミングとヘンリー・コンデルが「真正かつオリジナル原稿」のとりまとめと編集を行った。売価は1ポンドで、1000部ほど印刷された。

表紙を繰ると巻頭に劇作家の肖像があり、全集のタイトルでは全作品を「喜劇、歴史劇、悲劇」に分類し、劇作家への賛辞や、編纂に協力した貴族への献辞、编者による序文、ジャンルごとに記した目次（ページ番号付）などが置かれている。作品はシェイクスピア最後の作品と言われる『テンペスト』から始まり、「喜劇」14作、「歴史劇」10作、「悲劇」12作の順で、計36作の戯曲が収められている。なお、目次には『トロイラスとクレシダ』のタイトルが欠けているが、作品自体は印刷されており、悲劇作品群の最初に置かれている。

### 2. 『シェイクスピア戯曲集』 サード・フォリオ（第三・二折本）（復刻版, 1905年） ロンドン 1664年

*Mr. William Shakespeare's comedies, histories, and tragedies.*

全集の第3版である。ファースト・フォリオ（1623年）やセカンド・フォリオ（1632年）と異なり、サード・フォリオでは、シェイクスピアの肖像が左のページに移り、右のタイトルページには新たに7編の作品を加えたと書かれている。だが、現在ではこの7編のうち最初の『ペリクリーズ』のみがシェイクスピア本人による作品で、他の6編は外典（シェイクスピア本が書いた真正なテキストは見なされないもの）と見なされて、全集からは除外されている。

なお、ファースト・フォリオの目次に欠けていた『トロイラスとクレシダ』はセカンド・フォリオからは目次に含まれ、サード・フォリオもその目次を踏襲している。

### 3. 『ストックデール・シェイクスピア』 編者不詳 ロンドン：ジョン・ストックデール 1784年

*Stockdale's edition of Shakspeare: including, in one volume, the whole of his dramatic works : with explanatory notes compiled from various commentators : embellished with a striking likeness of the author.*

フォース・フォリオ（1685年）以降、初めて出版された1巻本の全集である。フォリオよりは小さいオクターヴォ（八折本。1枚の紙を3回折って16ページとする）としては最初の1巻本の全集である。左のページにシェイクスピアの肖像を掲げ、右のタイトルページにはこの肖像が劇作家に「驚くほどよく似ている」と書かれている。

18世紀に入り、シェイクスピアの全集は小型化、軽量化していく。この1巻本の全集もそうした流れを汲むものと思われる。また、シェイクスピアの全集は作家の紹介や伝記、資金的な援助をした貴族への献辞、歴代の詩人や文化人による賛辞等に割かれるページが増える傾向にあったが、ストックデール版の全集ではそうした作品以外のテキストを14ページに抑えている点に特徴がある。

#### 4. 『ボイデルのシェイクスピア劇銅版画集』

ロンドン：メッサー&ボイデル [1804年?]

*Boydell's graphic illustrations of the dramatic works of Shakespeare: consisting of a series of prints. Forming an elegant and useful companion to the various editions of his works, engraved from pictures, purposely painted by the very first artists, and lately exhibited at the Shakespeare Gallery.*

ロンドン市参事会員で、後にはロンドン市長も勤めたジョン・ボイデル (John Boydell, 1719-1804) が編集したシェイクスピア劇の名場面集で、105点の銅版画が収められている。

ボイデルはもともと出版業で成功した。その後は画商および画廊経営者としても活躍し、1789年からはロンドンのペルメルにシェイクスピア劇に着想を得た絵画専門の画廊「シェイクスピア・ギャラリー」を開設していた。劇作家の生誕 200 年を迎えたロンドンでは、デイビッド・ギャリックやサラ・シドンズらの名演が評判を呼んだこともあり、シェイクスピア劇への関心が高まっていたのである。

ボイデルは英国で制作される銅版画の質向上に尽力した人物で、有名画家や版画家に作品を依頼し、報酬を引き上げた。この結果、イギリスで製作される銅版画は他の西洋諸国のものと肩を並べるようになり、作品の販売市場も拡大したという

今回展示するのは、ロイヤル・アカデミーの初代会長で肖像画家のジョシュア・レノルズが描いた絵画を下絵にした銅版画版で、『夏の夜の夢』の妖精パックである。

#### 5. 『シェイクスピア作品集』 チャールズ・ナイト編 インペリアル版

ロンドン：ヴァーチャー 1875年 2巻本

*The works of Shakspeare: Imperial ed. with illustrations on steel from pictures by C. W. Cope ... [et al.]*

編者であるチャールズ・ナイト (Charles Knight, 1791-1873) は1839年に『絵入シェイクスピア』として全集をまとめている。この版では作品の本文や名場面の銅版画だけではなく、作品への導入、イラスト解説、衣装や小道具の解説などを絵入でわかりやすく紹介している点に特徴があった。

1839年の版をなぞりながら、インペリアル版ではより簡素で包括的な編集がなされている。イラストはフルページの銅版画46枚収録している。またこの版は、シェイクスピアの全詩作品と外典と見なされる13編の戯曲を収める。ただし、この外典13編はいずれもきわめて短い。

2巻本ではあるが、実質的には1巻本と見なされているのであろう。第1巻が『ヘンリー8世』の途中で終了し、第2巻はその続きから始まっている。

今回は、シェイクスピアのソネット (14行詩) 集より、第13番から22番までのページを展示する。

#### 6. 『世界図』 セバスティアン・ミュンスター

バーゼル 1544年 木版

Das erst general-Inhaltend die Beschreibung und den Circesel des Gant en Erdereichs und Moses.

16世紀ドイツの神学者で地理学者でもあったセバスティアン・ミュンスター (Sebastian Munster 1489-1552) による世界地図である。シェイクスピアは自らの劇場を「地球座」(The Glove) と名付け、人生を劇場になぞらえたが、当時の人々の世界認識を考える上で、この地図は興味深い。

## 7. 『世界図』 パウラス・メルラ

アムステルダム 1605年 銅板

Totius orbis cogniti universalis description.

16世紀後半から17世紀にかけて、地図製作の中心は木版から銅板へ、そしてイタリアやドイツからオルテリウスが活躍したベルギーのアントワープとメルカトルが活躍したオランダのアムステルダムに移る。大航海時代の結果、地図に記入される情報も、圧倒的に増えた。

### 【参考】シェイクスピアの肖像画

シェイクスピアの肖像画としては最も古いとされ、1600-1610年に制作されたジョン・テイラー作の油絵を銅版画にしたもののレプリカ。シェイクスピア像としては、もっとも本人に近いとする説もある。

## 第2部 貴重書にみるシェイクスピア劇の名言、名場面

### 8. 『ハムレット』 *Hamlet*

Hamlet: To be or not to be, that is the question. (第3幕第1場)

『シェイクスピア作品集』 ニコラス・ロー編

ロンドン：ジェイコブ・トンソン 1709-1710年 7巻本中第5巻

*The works of Mr. William Shakespeare: revis'd and corrected, with an account of the life and writing of the author.*

18世紀に入ると、大型のフォリオにかわり、シェイクスピアの戯曲を何冊かに分け持ち運びや扱いに便利な分冊形式の全集が出版されるようになる。その最初の多巻本の全集が、ここに展示した桂冠詩人のニコラス・ロー (Nicholas Rowe, 1674-1718) 編集によるもので、1709-10年に出版された。第1巻の巻頭ページに、17世紀に出版されたフォリオ版とは異なるシェイクスピアの肖像を掲げ、各戯曲のタイトルページ左には、劇の一場面を銅版画で示したイラストが掲げられている。イラスト入りの全集としては、ロー編集のものが最初のものである。

ここに掲げた『ハムレット』の銅版画は、エルシノア城内で上演した芝居をめぐる王妃ゲートルードが自室で王子ハムレットを叱責すると、先王ハムレットの亡霊が現れて、復讐を果たし母親を守るよう告げる場面である (第3幕第2場)。この挿絵において、ハムレットは長い上着を身に着け長髪巻毛の鬘をつけており、この全集が出版された18世紀の上流階級の服装をなぞっている点が注目される。ハムレットはデンマークという異国の王子であるよりも、全集が出版された18世紀の人間に近い人物として描出されているためである。

#### 8-1. 『幽霊』 井上勤訳述

東京：久野木信善 1890年 (明治23年) 再版

ラム姉弟による『シェイクスピア物語』に収められた『ハムレット』の日本語翻訳・翻案で、1888年に出版されたものの再版である。この時代に流行したボール表紙のイラストを用いている。明治初期の『ハムレット』翻訳翻案には、主人公であるハムレットをタイトルに用いて強調するものと、先王ハムレットの亡霊をタイトルに用いて強調するものがあった。

#### 8-2. 『妖怪』 松庵生訳述

東京：中西屋書店 1900年 (明治33年)

ラム姉弟による『シェイクスピア物語』に収められた『ハムレット』の日本語翻訳・翻案である。To be or not to be.にあたる部分は要約されており、「心気の疲労衰弱に。思わず身を鮮烈せ

られて。彼に迷い是に惑われつ。疑義いよいよ鋭く。決着ますます鈍く。頗る躊躇の念を生ぜられ。ために復讐の決行を大いに妨げられ給うぞ。是非もなき。」と読める。

### 8-3. 『沙翁悲劇ハムレット』 土肥春曙・山岸荷葉訳

東京：富山房 1903年（明治36年）

この年11月から東京の本郷座で上演された川上音二郎一座の『ハムレット』はこの版を使用した。登場人物名は日本名が使用され、ハムレットは照磨、オフィーリアは織江と呼ばれた。

### 9. 『ヘンリー5世』 *Henry V*

Henry V: We are the makers of manners, Kate. (第5幕第4場)

『シェイクスピア作品集』 アレクサンダー・ポープ編

ロンドン：ジェイコブ・トンソン 1723-25年 6巻本中第1巻および第5巻

*The Works of Shakespear: collated and corrected by the former editions.*

ファースト・フォリオの出版から約100年後、ニコラス・ローに続いて多巻本の全集を編集したのが18世紀屈指の大詩人アレクサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) である。ローの全集を底本としている。第6巻の巻末に各種インデックスが付され、編集にあたり比較・検討・利用された文献を明らかにしている。

次に、ポープの編集した全集の特徴をいくつかあげる。まずタイトルページを見ると、名前の綴りが *Shakespear* と語尾の *e* が抜けている。また、劇作家の肖像以外にはイラストを使用していない。さらに、タイトルページは赤字を用いて強調した二色刷印刷となっている。同様の印刷は、英国で最初に出版された英語辞書である、サミュエル・ジョンソンの『英語辞書』にもみられ、当時の印刷技術の発達をうかがわせる。

さて、ここに提示した箇所は、ヘンリー5世がアジャンクールの戦いに勝利してフランスを獲得し、さらにフランス王の娘キャサリン王女に求婚する場面である。「我は武人なり」と高らかに宣言するヘンリー5世だが、通訳を介しての求婚はうまくいかない。言葉の壁は厚く、ヘンリーは拙いフランス語を口にするが、かえって失笑を買う。そんな中で発するのが、このセリフで、直訳すると「ケイト、僕たち二人は作法 (manners) の作り手だ」という意味になる。因習にとらわれず自分たちのやり方でやればいい、というセリフである。

### 10. 『お気に召すまま』 *As You Like it*

Jaques: All the world is a stage. (第2幕第7場)

『シェイクスピア作品集』 ルイス・ティボルド編

ロンドン：H・リントット 1733年 7巻本中第2巻

*The works of Shakespear: collated with the oldest copies, and corrected: with notes, explanatory, and critical.*

古典学者であり、劇作家でもあったルイス・ティボルド (Lewis Theobald, 1688-1744) は、アレクサンダー・ポープの編集したシェイクスピア全集が、編者の判断で詩行の改行や語句の改変追加を行っていたのを批判し、自ら編集した全集を出版した。劇作家の名前の綴りも語尾に *e* をつけた形に戻している。また、最終巻の巻末に、過去の版本を「信頼性のある版」、「ほどほどの信頼性がある版」、「信頼性のない版」の3種類に分類したリストを添えている。

掲示の箇所は、厭世家で皮肉屋だが学識豊かなジェークイーズによる名セリフ「すべてこの世は舞台～」の部分である (第2幕第7場)。ジェークイーズは人間の一生を7段階に分け、人間は役者であって、それぞれの段階を演ずるのだと述べる。人間本来の姿と演ずる役割との乖離が生む、何とも形容しがたい不安定さや自己疎外こそが生きることの本質でもあることを指摘した点が何とも興味深い。また、このセリフにみられる *world* 「世界」は実際の世の中、つまり劇場

の外の世界だけではなく劇場そのものをも指していると言われている。シェイクスピア自身が出資して開設された「グローブ（地球）座」である。地球座は当時の劇場の慣例にならって、円形の劇場であった。地球を模したと思しき劇場で、人間の悲喜劇を舞台に乗せてお見せしましょう、とも受け取れるこのセリフには、シェイクスピアの自信と劇場に寄せる期待がうかがえる。

#### 10-1. 『御意のまゝ』 戸澤正保・浅野和三郎共訳

東京：大日本圖書 1908年（明治41年）

1905年より刊行された10巻の「沙翁全集」のうちの第8巻として出版された原書訳である。翻訳者のまえがきで浅野は「喜劇の中でも最も神韻を備えた」作品として『お気に召すまま』を紹介している。なお、全集編者の戸澤と浅野は東京帝国大学で恩師のラフカディオ・ハーンの勧めで翻訳を始めたこと、第1巻の序文にある。

#### 11. 『夏の世の夢』 *A Midsummer Night's Dream*

Lysander: [t]he course of true love never did run smooth. (第1幕第1場)

『シェイクスピア戯曲集』 サミュエル・ジョンソン編

ロンドン：J & R・トンソン 1765年 8巻本中第1巻

*The plays of William Shakespeare, with the corrections and illustrations of various commentators.*

18世紀きっての文人で、その博識ゆえに「ドクター」という敬称を付けて呼ばれることもあるサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-1784) が編纂したシェイクスピア全集である。本全集を刊行する10年前、ジョンソンは独力で7年の歳月をかけて完成させた『英語辞書』 (*A Dictionary of the English Language*) を出版しており、その中にはシェイクスピアからの引用が多数含まれている。ジョンソンいわく「最高の文人」からとった例文が、英語の語句の正しい使用法を示す、と考えたためである。

ジョンソンは自らの同時代人であり18世紀にシェイクスピアの全集を編集したロー、ポープ、デオボルドの版ではなく、ファースト・フォリオを底本として使用した。1623年の版がシェイクスピア自身の書いたものに最も近いと判断したためである。そのことが、第1巻のタイトルページに「修正、イラスト、解説を含む」として明記されている。展示したページにも明らかのように、脚注の形でジョンソンは本文の解説を加えている。

ここに紹介する『夏の夜の夢』は夏至の日に上演されたと思しき祝祭喜劇で、恋愛と結婚をめぐる人間と妖精の世界が交差しながら同時進行する。「まことの恋の道ゆきが、平坦であったことはありません」(第1幕第1場) はライザンダーという若者のセリフで、愛しい女性から振り向いてもらえない嘆きと、芝居のプロットとを暗示させる。

#### 12. 『ロミオとジュリエット』 *Romeo and Juliet*

Romeo: Hang up philosophy!

Unless philosophy can make a Juliet. (第3幕第3場)

『シェイクスピア戯曲集』 サミュエル・ジョンソン&ジョージ・スティーブンス編

第5版 第1集注版

ロンドン：J・ジョンソン 1773年 21巻本中第20巻

*The plays of William Shakspeare: with the corrections and illustrations of various commentators.*

サミュエル・ジョンソンと18世紀のシェイクスピア研究者であるジョージ・スティーブンス (George Steevens, 1736-1800) が編集した全集である。スティーブンスの研究に感心したジョンソンが編集を持ちかけたもので、ジョンソン版を底本とし、脚注の形で注釈を加えている。

最初の2巻はこれまでのシェイクスピア批評を収め、以降1冊に2作品を収める。ファースト・フォリオ同様、喜劇、歴史劇、悲劇の順番に2作品ずつ並んでいるが、第20巻と21巻は例外で、喜劇と悲劇が1作ずつ収められている。『ロミオとジュリエット』は最も初期の喜劇である『間違いの喜劇』と、第21巻は初期の悲劇（ローマ劇）である『タイタス・アンドロニカス』と、サード・フォリオ以降シェイクスピアの作品と見なされるようになった『ペリクリーズ』である。

ここに展示した部分はロミオのセリフで、直訳すると「哲学はやめてください。哲学でジュリエットが作れないのなら」との意味になる。理論や理屈ではジュリエットを作れないというこのセリフには、理性のコントロールがきかず、恋愛の激情に流されていくロミオのはやる気持ちが伝わってくるようなセリフである。『ロミオとジュリエット』は敵対する名家の確執を枠組みとする悲劇だが、若い二人はすでに、こうした枠組みの外側で事を進めているのかもしれない。

12-1. 『春情浮世之夢』 河島敬蔵訳 再版

和歌山：赤城友次郎 1887年（明治20年）

1886年に出版されたものの再版。翻訳者の河島敬蔵はこれまで『ジュリアス・シーザー』の和訳を出版したこともあり、シェイクスピアの原書訳に先鞭をつけた人物である。

河島の翻訳は『自由太刀余波鋭鋒』（後出 15-1）のような浄瑠璃風のスタイルを取っている。ジュリエットはジュリーのように簡略化され、原書の哲学（philosophy）の訳語として「理学」を用いていることが分かる。

12-2. 『西洋娘節用 仇結奇の赤繩』 春煙小史（木下新三郎）訳

誠之堂 1887年（明治20年）

ラム姉弟『シェイクスピア物語』を翻訳したもの。ここにはその冒頭部分を展示した。

13. 『間違いの喜劇』 *The Comedy of Errors*

Dromio of Ephesus:

We came into the world like brother and brother,

And now let's go hand in hand, not one before another.

（第5幕第1場）

『シェイクスピア劇作品集』 ジョーゼフ・ラン編

オックスフォード：クラレンドン・プレス 1786年 6巻本中第1巻

*The dramatic works of Shakspeare.*

編者のジョーゼフ・ラン（Joseph Rann 1733-1811）は英国中部の都市バーミンガムに生まれ、オックスフォード大学トリニティ・カレッジで学んだ後、コベントリーにある聖トリニティー教会の教区司祭を勤めた。同時代のシェイクスピア編者である、サミュエル・ジョンソンやジョージ・スティーブンス、1790年にシェイクスピア全集を出版し19世紀前半に出版された全集の底本として使われることも多かったエドモンド・マローンに比べるとランが編纂した全集の評判はそれほど高くない。しかし、印刷状態がよく、全集のタイトルページに自らが聖職者であることを明記し、次のページではパトロンであるシェフィールド卿への献辞を記したランの版は、シェイクスピア作品への興味が高まっていた18世紀後半の時代の息吹が感じられる。

今回展示した部分は『間違いの喜劇』の大団円（第5幕第1場）で、長い間、嵐によって生き別れになっていた双子の息子と老齢の夫婦が感激の再会を果たす場面である。祝宴に向かう双子（エフェソスのドロミオとシラキュースのドロミオ）だけが舞台に残り、このセリフを言



って舞台そでに消えていく。直訳すると「俺たちは双子の兄と兄としてこの世に生まれてきたのだから、手に手をとって行こう、どっちが先っていうのはなしで」となる。シェイクスピアの喜劇では双子の取り違えや家族の離散と再会をプロットにしたものが多く、初期の喜劇では壊れた秩序が元通りになって終わる。

だが、家族であっても長年離れていた兄弟や夫婦が再び以前のような絆を取り戻せるのか不安は残る。『間違いの喜劇』のような初期喜劇が大団円を結ぶのに対して、もう少し後の喜劇、例えば『十二夜』や『お気に召すまま』では、こうした秩序の回復に水を差すような登場人物が配されることになる。

### 13-1. 『鏡花水月』 渡邊治訳

集成社 1888年（明治21年）

『鏡花水月』は『間違いの喜劇』の日本語訳で、日本では最初のシェイクスピア喜劇の原書訳である。原書訳としては、河島敬蔵の『ジュリアスシーザルの劇』、同氏による『春情浮世之夢』に続く3作目となる。渡邊は巻頭の「読者に告ぐ」において、原文は韻を踏んだ形式の文章だが、翻訳ではこれを使うわけにはいかないの、通常の談話体に改めた、と述べている。坪内逍遙が『自由太刀余波鋭鋒』の翻訳で用いた浄瑠璃の口調とは異なる翻訳の形式を試みている点が注目される。

### 14. 『ヴェニスの商人』 *The Merchant of Venice*

Portia: Shed thou no blood. (第4幕第1場)

『シェイクスピア劇作品集』 サミュエル・エイスカフ編 第2版再版  
ロンドン：ジョン・ストックデール 1807年 2巻本中第1巻

*The works of William Shakspeare, from collected text of Johnson and Steevens.*

サミュエル・エイスカフ (Samuel Ayscough, 1745–1804)は図書館司書および目録作成に顕著な業績を残した人物で、初めてシェイクスピアの文献目録を作成した人物である。今回展示する版は1790年に出版されたものの再版で、全集のタイトルページに謳われているように巻末には詳細な目録が付されている。この目録は、出版社であるジョン・ストックデールの委託により作成された。

エイスカフ版は1784年に出版された『ストックデール・シェイクスピア』(前出3)を2分冊にしたもので、コンパクトなサイズのもの、さらに持ち運びやすく、かつ広く普及させることを狙ったものである。

展示の部分は、『ヴェニスの商人』の中でも、特に有名な裁判の場面である。シャイロックに借金をした際、アントーニオは自身の胸の肉1ポンドを担保として差し入れた。返済日になっても資金が用立てできないため、シャイロックは担保で資金の回収をはかろうとする。その裁きの場に、裁判官になりすましたポーシャが現れ、胸の肉をとってもよいが「血は一滴たりとも流してはならない」と申し渡す。ポーシャの夫であり、結婚のために友人アントーニオから借財したバッサーニオを救うためであった。

ファースト・フォリオで、この作品は喜劇に分類されている。しかしその結末に素直に喜劇とは呼べない後味の悪さが残る。

### 14-1. 『人肉質入裁判』 井上勤訳

東京：今古堂 1883年（明治16年）

ラム姉弟の『シェイクスピア物語』からの翻訳である。タイトルからも分かるように、胸の肉

1 ポンドを抵当に借金をし、その胸の肉をめぐる裁判が行われるという筋書きが強調されている。展示の部分は、まさに胸から肉を切り取らんとする部分に挿入された版画である。当時の風俗を伝える衣装が興味深い。

#### 14-2. 『人肉質入裁判』 井上勤訳

東京：野村銀次郎 1886年（明治19年）

展示番号14-1番は、翻訳書の出版から3年後の1886年に複数の異なる出版社から再版された。これはそのひとつだが、初版にはなかった厚手の紙にイラスト入りの表紙がついている。挿絵版の印刷も鮮明である。『ヴェニスの商人』は1877年（明治10年）に「胸肉の奇訟」と題した翻案ものが雑誌に掲載され（翻案者未詳）、また1885年（明治18年）には宇田川文海による翻案「何桜彼桜銭世中」が『大阪朝日新聞』に掲載され、その後劇場で上演される等、話題の作品であったことがうかがわれる。

ここには、その冒頭のページを展示した。

#### 15. 『ジュリアス・シーザー』 *Julius Caesar*

Caesar: Et tu, Brute? Then fall, Caesar. (第3幕第1場)

『シェイクスピア全集』 A. J. ヴァルヴィ編

ロンドン：ヘンリー・G・ボーン 1844年 15巻本中第11巻

*The plays and poems of Shakespeare/ according to the improved text of Edmund Malone ; including the latest revisions, with a life, glossarial notes, an index, and one hundred and seventy illustrations, from designs by English artists.*

アブラハム・ジョン・ヴァルピー (Abraham John Valpy, 1787-1854) はロンドンで活躍した出版業者で、エドモンド・マローンの版を底本とし、ボイデルの「シェイクスピア・ギャラリー」からイラスト170点を含める版を出版した。巻頭の広告にもあるように、この版は「使い勝手がよく、鑑賞にも耐え、経済的」な版である。片手に収まるサイズの版型で、各巻の表紙を作品の一場面を模した金の型押し模様で飾った。また、この全集はシェイクスピアの詩作も含める。

展示の部分は、ジュリアス・シーザーの最後のセリフ「お前もか、ブルータス」(第3幕第1場)を示す。文学作品からの引用としておそらくは最も有名なものであろう。ラテン語で et は英語の and、tu は you を意味する。友人ではあるが、指導者としては横暴なシーザーの振る舞いに危機感を募らせたマーク・ブルータスは仲間と共謀して、元老院に登院する途中のシーザーを襲う。親友と思っていたブルータスに刺されたシーザーはこの後、「ならば終わりだ、シーザー」と言って息絶える。しかし、ブルータスの天下は続かず、マーク・アントニーによって追われる身となる。

#### 15-1. 『該撒奇談・自由太刀余波鋭鋒』 坪内雄蔵訳

東京：東洋館 1884年（明治17年）

坪内雄蔵(のちの逍遙)による原書訳である。浄瑠璃の七五調を用いている。その理由として、巻頭に掲げられた「附言」において、シェイクスピアの劇はセリフのみで芝居が進行するので日本の読者には馴染みにくいところがあるので、「意味の通じ易きを専要とし浄瑠璃にす」と述べている。しかし、この七五調の翻訳は、その後のシェイクスピアの原書訳に大きな影響を与えた。

15-2. 『羅馬盛衰鑑』 鶯林學人・天香逸史戯訳

駿々堂 1886年(明治19年)

1883年2月27日から4月11日にかけて、『日本立憲政党史新聞』に掲載された『ジュリアス・シーザー』の原書訳を単行本化したものである。新聞連載時には翻訳者名が記されていないが、単行本には鶯林學人(河島敬蔵)、天香逸史(小宮山天香)と明記された。

16. 『オセロー』 *Othello*

Iago: O, beware, my lord, of jealousy;

It is the green-ey'd monster, (第3幕第3場)

『シェイクスピア作品集』 メアリー・C・クラーク編

ニューヨーク: D・アップルトン 1868年

*Shakespeare's works. edited, with a scrupulous revision of the text.*

メアリー・コーデン・クラーク(Mary Victoria Cowden Clarke 1809-1898)はイギリスの文筆家で、女性としては初めて、戯曲と詩作を含めたシェイクスピアの全作品を編集した。ここに展示したニューヨーク版の全集は、彼女が夫のチャールズと共に編纂し、1860年に出版した全集のニューヨーク版である。タイトルページにはテキストを「綿密に改訂した」とある。

メアリーとチャールズはまた、シェイクスピア作品の索引目録作りにも顕著な業績を残し、1844年から45年の間18回に分けてその結果を発行した。二人の作成した索引は、サミュエル・エイスカスのものを上回る完成度であったと言われる。なお、メアリー・クラーク編纂による全集は8巻本のもので、1876年(明治9年)には東京書籍館に架蔵されていた。

展示の場所は『オセロー』の中でも最も人口に膾炙したセリフ「嫉妬にお気を付けなさい/嫉妬とは緑の目をした怪物なり」の部分である。シェイクスピアの時代に、嫉妬は緑色や黄色に例えられることがあった。人間の気質で言うと胆汁質にあたる色である。『ヴェニスの商人』でも、ポーシャが「緑色の目をした嫉妬」(第3幕第3場)と表現する。なお、セリフはこの後、「嫉妬はそれを育む肉体を欺く」と続く。嫉妬の炎は自らを焼きつくすゆえ注意せよ、というわけである。

16-1. 『痘痕伝七郎 名花の深山木』 條野伝平(採菊)著

東京: 博文館 1893年(明治26年)

『オセロー』の翻案ものである。舞台を嘉永5年の江戸に設定し、旗本武士の娘と伝七郎との物語に書きかえられている。巻頭には、シェイクスピアの原作は「黒人の軍人と白人の令嬢が想いあってついに夫婦になるという一大傑作」であり、それを翻案したものであると明記されている。

## 参考文献・資料

Boydell's Shakespeare Gallery, British Library

<<http://www.bl.uk/shakespeare/articles/john-boydells-shakespeare-gallery-1789-1805>>

Eighteenth-century editions of Shakespeare at Senate House Library

<<http://shakespeare.senatehouselibrary.ac.uk/resources/18th-century-editions>>

First Folio at the Bodleian Library, The Bodleian's First Folio

<<http://shakespeare.bodleian.ox.ac.uk/the-bodleians-first-folio/interactive>>

Folger Shakespeare Library <<http://www.folger.edu/>>

Nicholas Rowe's Edition of Shakespeare, British Library

<<http://www.bl.uk/collection-items/the-first-illustrated-works-of-shakespeare-edited-by-nicholas-rowe-1709>>

Pope, Alexander. "Preface to Shakespeare."

<<https://andromeda.rutgers.edu/~jlynch/Texts/pope-shakespeare.html>>

Shakespeare's Dramatic Works, vol. 1

<<http://shakespeare.senatehouselibrary.ac.uk/exhibition/gallery-three-lover/shakespeare%E2%80%99s-dramatic-works-vol-1>>

インキュナブラ 西洋印刷術の黎明 国立国会図書館 HP <<http://www.ndl.go.jp/incunabula/index.html>>

川戸道昭『明治のシェイクスピア』（東京：大空社ナダ出版センター、2004年）。

川戸道昭・榊原貴教『シェイクスピア図絵：付資料と索引』明治のシェイクスピア<<総集編>>2（東京：大空社ナダ出版センター、2004年）。